

保育環境構成における保育者の意識と環境構成の「難しさ」の検討

表 夏子¹・七木田 敦²

Examining the awareness of childcare workers concerning the challenges of creating an environmental structure in a childcare environment

Natsuko OMOTE¹, Atsushi NANAKIDA²

Abstract: The purpose of this study is to explore the factors behind the challenges related to environmental configuration by clarifying how childcare workers perceive this process. Group interviews were conducted with childcare workers, and the resulting data were categorized and discussed. We determined that childcare workers' awareness of environmental composition is as follows: (1) environmental structures aimed at emphasizing child-centeredness, (2) environmental structures aimed at childcare workers' peace of mind, and (3) a belief that the process of configuring the environment is a team effort.

The factors contributing to the challenges of configuring the childcare environment are: (1) a lack of time and structural problems, (2) unique challenges depending on the children's development, and (3) cooperation between childcare workers.

Although collaboration among childcare workers can be a source of difficulty, if the division of roles among them can proceed smoothly, the challenges of environmental configuration will be alleviated, and it will be easier to tackle the process. It was suggested that cooperation and collaboration among workers is a vitally important element of the environment-creation process.

Key words: childcare environment, creating an environmental structure, awareness of childcare workers

問題と目的

乳幼児期の保育・教育への投資が有効であるというジェームズヘックマンの研究結果(Heckman, 2013; 古草訳2015)を受けて、乳幼児期の保育・教育に関する政策が国際的に見ても重要な課題になってきた。日本では、平成29年の幼稚園教育要領、保育所保育指針の改定・改訂により、幼児教育重視策の教育改革が進み始めた(汐見2018)。保育所保育においては、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うため

に、環境を通して養護及び教育を一体的に行う(保育所保育指針解説2018)と示されている。「環境」という言葉は、1947年の学校教育法よりすでに使われてきていたが、近年、よりその重要性が注目されているといえる。保育所保育指針(2018)では、保育の方法として「健康、安全で情緒の安定した生活ができる環境や、自己を十分に発揮できる環境を整えること」と示されており、保育者は養護的側面と教育的側面両側から環境を構成していくことが求められている。要領・指針では、いたるところに「環境」についての記述があり、保育、幼児教育において環境構成が非常に重要な要素となっていることが分かる。しかし、「多様で豊かな環境」、「自発的、意欲的に関われる環境」など、どれも抽

1 広島大学大学院人間社会科学科博士課程前期

2 広島大学大学院人間社会科学科附属幼年教育研究施設

象的であり、具体的な環境構成の方法については、「子どもからの働きかけに応じて変化したり、周囲の状況によってかわっていったりする（保育所保育指針解説2018）」ことから記載はない。これについて、高山（2014）は、保育において教育を目的とする技術と、情緒の安定を促す技術が時に矛盾を抱えていることに触れ、情緒の安定と葛藤等、集団と個のほどよい状態を探し、空間と時間のマネジメントを行う必要があること等、保育の方法には高い専門性と柔軟性が求められるとしている。また、上田（2013）は、豊かな構造的な保育の質があったとしても、保育環境をどのように構成し、活用していくのが大事であり、それが保育者の専門性であるとしている。つまり、保育環境を構成することは、子どもに関する幅広い知識や子どもの姿に応じて環境を変化させていく柔軟性といった保育者としての専門性が強く求められている。「保育の質研究は、保育者の専門性を問うてきた（秋田2007）」のように、保育の質の向上のためには、保育者の専門性が発揮されることは不可欠であり、環境構成においても保育者が専門的に行うことで質の高い保育環境が保障されると考えられる。西本ら（2006）は、保育者によるコーナー設定を一年を通して観察し、子どもの発達とのかかわりや保育者の意図や保育プログラムとの関係を明らかにしている。この実践から、保育士はコーナーを通してねらいを子どもたちに示すなど、保育計画に基づいてコーナー設定は行われていくが、コーナーの配置やつながりといった詳細な設定は実際の子どもの姿を反映しながら行われていること、同じコーナーであっても、年齢によって保育者のねらいは違うため、遊具の種類や数が変わってくるなど、保育者が専門性を発揮しながら柔軟に環境を変化させていく様子が見えてくる。しかし、漁田（2018）がキャリアアップ研修に参加したベテラン保育者を対象に行った調査では、「新保育指針」「保護者への対応」に続き、「環境設定」を乳児保育において「困った・勉強不足」と感じる保育者が多いことが明らかとなった。

保育の難しさについては、古賀（2011）や佐々木ら（2019）の研究がある。古賀（2011）は、1歳児保育の難しさの構造について「1歳児保育の特質を踏まえた援助の志向と構造上の実現困難との間のジレンマ」としている。古賀（2011）の研究では1：6の保育士の配置基準と保育の難しさについて丁寧に分析されているが、難し

さが生じた時の具体的な保育実践は明らかにされていない。佐々木ら（2019）は、保育者が困難を感じ、保育実践を難しくさせている要因について検討し、保育者の直面している困難にはいくつかの段階があることを示唆している。佐々木ら（2019）の研究は、他園での保育を見た保育者らが自園でできるかどうかについて述べた意見を分析したものであり、日々の自園での保育実践について検討されたものではない。保育者はなぜ、環境構成に「難しさ」を感じているのだろうか。経験や研修を重ねたベテラン保育者も難しいと感じているなら、知識や経験では解決できない事象があるのではないだろうか。

本研究の目的は、保育者が環境構成を具体的にどのように意識しているのか、また、環境構成に対する意識をどのように実践につなげようとしているかを明らかにすることを通して、環境構成の「難しさ」の要因を探ることである。本研究では、高山（2014）の環境構成の定義を参考にしながらも、保育室における物的、空間的環境に注目した。しかし、環境のすべてがばらばらに存在するのでは教育環境とはならず、物や人や場などが関連して1つの状況を作り出す（伊神ら1990）ことが重要であるため、物の配置や空間の構成に込められた保育者の意図にも注目し分析を行った。

方法

研究協力者 H市内のX保育所において保育業務に携わっている、または昨年度までX保育所にて保育業務に携わっていた保育者11名。経験年数によって、5年未満群、5-10年群（5年以上11年未満）、11-19年群（11年以上20年未満）、20年以上群の4グループに群別し、それぞれのグループでグループインタビューを行った。5年未満群は対象保育者が2名であった。その他のグループは3名である。群別したグループごとにインタビューを行った理由は、同じX保育所に勤務している保育者同士のため、経験年数や職位に左右されることなく語れる環境をつくるためである。

調査方法 安梅（2001）のグループインタビュー法を採用し、各グループ40～45分間のグループインタビューを行った。グループインタビュー法を採用した理由は、同じX保育所に勤務する保育者同士のやり取りという日常的なかかわりの中から、より現実の状態に近い形で意義深い情報を得ることができる（安梅2010）ことや、

本研究においては、保育者が環境構成をどのように意識しているか、自明化していない部分も含めて検討したいと考えたためである。①環境構成の実践事例、②環境構成のねらい、③理想とする環境構成、④乳児クラスと幼児クラスの違いについて、筆者がインタビュアーとなりながら、自由に意見交換を行った。

分析方法 安梅(2001)のグループインタビューの分析に依拠して行った。逐語記録から、一次分析(重要アイテムの抽出)、二次分析(重要カテゴリーの抽出)を行い、得られたカテゴリーを分類し考察した。

グループインタビューを実施するにあたりX保育所の所長に研究方法について相談した上で、研究協力者11名には、研究目的と意義及び、データ利用への同意について、いつでも撤回する権利を有することを口頭及び書面にて説明を行い同意を得た。

結果

グループインタビューを行った結果、全体で367のカテゴリーが抽出された。

1 経験年数による抽出されたカテゴリーの比較

抽出されたカテゴリーを環境構成のねらい、

乳児幼児の違い、保育者の思いに分類し、経験年数別に比較すると表1のようになった。なお[]内は二次分析で抽出されたカテゴリー、[]内は保育者の語りである。

環境構成のねらいでは、[多様な経験]、[遊び込み]、[遊びの自由度]について、すべての経験年数で語られた。また、乳児幼児の違いについては、幼児の遊び場については、保育者の思いについては、[困難感]、[職員連携]に関して、すべての経験年数群で言及されていた。

グループによって、カテゴリーが抽出されない項目があるが、研究協力者が現在担任しているクラスの状況や、インタビュー時間が40分程度と短時間であったことから、該当するテーマに至らなかったとも考えられ、得られたカテゴリーの経験年数による特徴や差異は確認できなかった。そのため、経験年数による群別はせず、4グループのインタビューで得られたカテゴリーを統合、類型化し分析を行った。

2 環境構成のねらい

環境構成のねらいは[教育的意図(多様な経験, 遊び込み)]、[子どもの安心(楽しい時間, くつろぎの空間)]、[安全(飛び出し, 怪我の危険性, 走り回り, 玩具以外での遊び)]、[保育者の心のゆとり(収納の工夫, 遊びの自由度)]

表1 経験年数による抽出されたカテゴリーの比較

		5年未満群	5-10年群	11-19年群	20年以上群	
環境構成のねらい	教育的意図	多様な経験	+	+	+	+
		遊び込み	+	+	+	+
	子どもの安心	楽しい時間	+	+	+	-
		くつろぎの空間	-	+	+	-
	安全	飛び出し	+	-	-	-
		怪我のしやすさ	+	-	-	+
		走り回り	+	+	+	-
	保育者の心のゆとり	遊びの自由度	+	+	+	+
		収納の工夫	+	-	+	+
	乳児幼児の違い	乳児	優先課題 情緒の安定	-	+	+
安全			+	-	+	+
子ども理解				+	+	+
幼児		遊び場	+	-	+	-
		優先課題 好きな遊び	-	+	+	-
		子ども理解	-	-	+	+
遊び場	+	+	+	+		
保育者の思い	環境構成の重要性	+	-	+	-	
	人的環境の重要性	+	-	+	-	
	環境の捉えの変化	+	+	-	+	
	困難感	+	+	+	+	
	職員連携	+	+	+	+	

に整理された。(表2)

教育的意図 保育者は【遊びに向かう意欲】があることが、【遊び込み】につながり、子どもの力を引き出すことから、子どもの興味に合わせた【遊び込み可能】な環境が必要だと考えていた。しかし、子どもが【集中して遊ぶのは稀】であり、様々な【遊びの積み重ね】が、後の【遊び込み】や【集中力の伸び】に繋がると考え、子どもが好きな遊びを見付けるまでの過程を大切にしていた。さらに、【教育的意図】を含んだ【発達相応の遊び】を環境構成に意図的に織り込んでいくことで【多様な経験の機会提供】

を行っていた。

子どもの安心感 保育者は、保育室は子どもが【毎日通う場】であるため、子どもが【遊びへの期待や意欲】をもち、【登所の楽しみ】になる環境を構成したいと考えていた。そのためには、【翌日への期待】となるような【遊びの連繋】が必要であり、それを実現できるような【遊びの設定】が必要であると考えていた。さらに、コーナー配置の工夫により【静と動の分離】を行い、【動線の交錯】による【遊び込みの阻害】を防ぎ、安心して遊べる環境を目指していた。
安全 安全面への配慮は保育者にとって絶対で

表2 環境構成のねらい

環境構成のねらい		環境構成の方法	保育者の思いや子どもの様子
教育的意図	多様な経験	子どもが気付く仕掛け 置き場の工夫 多様な経験の機会提供 発達相応の遊び 手指操作 ねらいを遊びに内包 提示方法の提案 興味の把握 興味関心に沿ったコーナー コーナーの数 遊び選択可能 多様な経験の繰り返し 本物の提示 見立て遊びの充実 絵本コーナー 粗大遊び 感触遊び	遊びの積み重ね 集中して遊ぶのは稀 保育者の介入必要 個々の興味の違い 集中時間の短さ集中力の伸び 身辺自立への意欲の高まり 身辺自立の過程 発達の促し 楽しさ 困難感
	遊び込み	遊び込み可能な環境 繰り返しの遊び 好きな遊び 遊び方が限定されない玩具 自由にアプローチ可能 遊びの手引書 素材の分類 遊びに合わせた物の配置 制作コーナー 廃材の設置 空き教室の活用 制作・遊び・展示 見立て遊び パ	集中できる空間 遊びの積み重ね 集中 遊びに向かう意欲 遊びの応用 動線の交錯 遊び込み阻害 惹きつけられるものがあること トラブル減少 保育者の介入の必要無 場の雰囲気の高まりの実感 男女共有の遊びへ拡大 子どもが感じる楽しさの理
子どもの安心	楽しい時間	遊び場設定 コーナー常設 静と動の分離 興味の把握 遊びの連繋	子どもの安心感 子ども視点 楽しい時間 毎日通う場所 登所の楽しみ 遊びへの期待や意欲 翌日への期待 環境の変化は不安要因 子どもの安心感
	くつろぎの空間	くつろぎの場 囲われた場 玩具の設置 自分でできる遊びの提示	子どもの安心感 心地良さ 特定の子どもの居場所のんびりしたい子ども 不安定な子ども
安全	飛び出し	卒塔婆見える場設置 保育室以外の居場所 雨天時の遊び場 くつろぎの場 見守り声掛け可能範	子どもの利用有 適している実感 子どもの思い理解 指示・禁止の声掛けへの躊躇い
	怪我の危険性	繰り返し洗濯か 柔らかさ必要 畳の利点	安全重視 安定感のなさ 危険排除 保育者の安心感 保育室の構造的な問題 衛生
	走り回り	空間の広さ 静と動の分離 コーナー配置の工夫 走り回りをコントロール 家具の配置	落ち着かない雰囲気 走り回りをアフォード 走ることは負の要因 死角の発生
保育者の心のゆとり	遊びの自由度	コーナー常設 自由にアプローチ可能 自由な持ち出し 環境の再構成 ひっくり返しOKの環境 見えない玩具 見える玩具 手近なもので遊び場作成 遊び選択可能 コーナーの数	保育者の介入の必要 落ち着かない雰囲気 指示・禁止の声掛け 遊びの自由度アップ 遊び場の使用減 再構成の必要性 指示禁止の減少 子どもの遊びを俯瞰 トラブルの減少 保育者の介入減 保育者間での共有事項 時間の経過 魅力の低下
	収納の工夫	遊びと収納が一体化 整頓された環境 立って遊ぶつくり 出しっぱなし玩具 子どもと片付け可能な工夫 見える収納 ふたなし収納 ひっくり返せない環境	片付け容易 他玩具との混合 散らばりへの負担感 指示・禁止の声掛けへの躊躇い 保育者の負担感 保育者の負担減 玩具の散らばり 困難感 子どもができない片付け

あった。保育者は保育室からの「飛び出し」や、保育室内での「走り回り」は事故につながる恐れがあり、「負の要因」であると考えており、「子どもの様子」や保育者の困り感に合わせた環境構成を行っていた。「走り回り」においては、保育者は家具やコーナーの配置によって「走り回りをアフォード」してしまうこともあれば、「走り回りをコントロール」できることを経験から実感していた。そして、「子どもの様子」に合わせて試行錯誤しながら、安全に遊べる環境を目指していた。

保育者の心のゆとり 保育者は、玩具の「自由な持ち出し」や、遊び場へ「自由なアプローチ可能」にすることは、「指示・禁止の減少」につながり「保育者の心のゆとり」につながると感じていた。「子どもがいっぱい好きな物出して、片付けるのが結構大変ですけど。でももうそんなに、あれしちゃいけないよってということもなく」など、「遊びの決定権」が保育者であった時の経験と比較しながら語られた。また、保育者は「保育者の心のゆとり」の低下を招く原因の一つは、子どもができない片付けが生じることであると考えており、子どもも一緒に片付け可能な工夫を行い「片付け容易」な環境にすることも「保育者の心のゆとり」につながっていると考えていた。

以上のことから、環境構成のねらいについて、保育者は、①遊び込みによる教育的効果、②子どもの安心の保障、③子どもの姿に応じた安全の保障、④保育者の心のゆとりと考えていることが明らかになった。

3 乳児クラスと幼児クラスの環境構成の違い 乳児クラスの環境構成

情緒の安定と安全が優先 乳児クラスの環境構成について、保育者は「環境の変化は不安要因」であると捉えていた。乳児クラスは母親の復職のタイミングでの入所が多く、1年間を通して子どもが増えていく。そのため、「場所や人へ慣れること」つまり「情緒の安定」が優先課題とされていた。また、活発に動くことを楽しむ乳児の遊びを保障しながらも、保育者が「事故防止の必要性」を強く感じており、「育ちに適した玩具の作成」は行うが、保育室には「必要な物のみ配置」していた。

子どもの思いの想像と保育者間の話し合いから子どもを理解 保育者は「子どもが遊ぶ様子」から子どもの「思いの想像」と、「保育者間の話し合い」をすることで、環境に必要な物の把

握を行っていた。インタビュー中、「子どもの姿」という言葉が幾度も保育者から語られ、「今」「この子」を起点とした、「子どもの実態」と「保育者の困り感」から考えていく必要性を感じていた。

幼児クラスの環境構成

遊び込みできる環境が優先 保育者は幼児クラスの環境構成は、子どもの興味関心に沿った遊びを中心に考えていた。そして、「遊び込み」が大切と考え、その時の遊びに合わせて、「遊び場の確保」や必要な道具の用意を行うなど、「継続的な遊び込み」や「探求的な遊び」をねらった環境構成を行っていた。

子どもの言葉による表現から子どもを理解 幼児クラスは子どもの「言葉による表現」から「要望の理解」が可能であり、「夢中度の把握」も容易であると感じていた。しかし、「恒常的な環境」が遊びに向かう「意欲の低下」につながることも多く、「今」の子どもの「関心事の推測」をし、「頻繁な環境の再構成」を行っていく必要を感じていた（表3）。

4 保育者の思い

保育者の思いに注目して抽出したカテゴリーを検討したところ、「環境構成の重要性」、「人的環境の重要性」、「環境の捉えの変化」、「困難感」、「職員連携」に整理された（表4）。

環境構成の重要性 保育者は、他年齢児の保育室で過ごした時の子どもの様子や日々の保育実践から、環境が子どもに与える影響の大きさを実感し、子どもの様子に合わせた「頻繁な環境の再構成」の必要性等、保育実践における環境構成の重要性を認識していた。

人的環境の重要性 本研究は、物的、空間的環境に焦点を置いて検討するため、グループインタビューにおいて、人的環境についての質問は行わなかった。しかし、子どもと遊びを通して「達成感を共有」した事例、好きな遊びがある環境の中で、保育者が子どもと一緒に遊ぶことで子どもの成長を実感した事例等、物的空間的環境構成の中に自然と保育者自身が入り込み、子どもの遊びを支えていた。

環境構成の捉えの変化 保育者の語りから、X保育所では、2年程前から、子ども主体の保育実践を行うため、園内研修を行うなど、質の高い保育を目指した取り組みを園全体で進めていることが分かった。これに伴い、保育者の環境構成の捉えにも変化があり、5年未満群の保育者も含めて「意識の変化実感」をしており、保

表3 乳児クラスと幼児クラスの環境構成のちがい

乳児幼児の違い		環境構成の方法	保育者の思いや子どもの様子
乳児	情緒の安定	心地良い空間の確立 心地良い遊び場	子どもの安心感 方法模索 環境の変化は不安要因 途中入所の多さ 場所や人へ慣れること
	優先課題	柔らかさ必要	怪我のしやすさ 隙間への入り込み 安全重視 言葉での指示の難しさ 2歳児の発達の特徴 安定感の無さ 保育者の安心感
	子ども理解	遊び場の使用減 子どもの様子 適当不適當の判断 興味遷移の速さ 配慮事項は全く別物 想像と保育者の話し合い 最適な玩具の追究 発達に伴う遊びの変化 興味や発達に伴う遊びの変化	
	遊び場	床で遊び展開 家具の配置工夫 静と動の分離 粗大遊びコーナー 育ちに適した玩具の作成 必要な物のみ配置 他玩具の玩具をレンタル 頻繁な環境の再構成	
幼児	優先課題	好きな遊び	特定の遊び 集中と継続 好きな遊びができる環境
	子ども理解		継続的な遊び込み 興味の把握 言葉による表現 夢中度の把握 遊びの創造
	遊び場		机出し遊び場設置 子ども同士の関わり 発展要素を付加 情緒への影響の少なさ 無制限の実行可 用具の設置 探求可能な環境 道具や素材の選択と配

表4 保育者の思い

保育者の思い	抽出されたカテゴリー
環境構成の重要性	他クラスでの遊びの難しさ 環境構成の必要性 年齢による環境構成の違い 年齢別保育の必要感 環境の影響の少なさ
人的環境の重要性	環境充実への取り組み 子どもとの関係構築の重要性実感 環境構成のみでは不十分 低年齢児 子ども同士の関わり
環境の捉えの変化	設定保育 保育者主導の遊び 片付け場所の工夫 自身の経験 ひっくり返しの習慣 意識の変化実感 自由にアプローチ可能 興味に沿った環境の良さ 自由度が高い環境 手作り環境の増加 発達相応の遊び 遊びの決定権 片付けの負担増 保育者の心のゆとり 指示・禁止の減少 環境構成の過程感心 戸惑い 子どもの様子基点 興味の把握 ひっくり返せない環境 ひっくり返しOKの環境
困難感	コーナーの作りにくさ コーナー設置方法模索 試行錯誤の必要性 余裕の無さ 落ち着かなさ 学年による好みの遊びの違い 必要な道具の希望提出 即購入不可 代替案検討 時間が必要 子どもの人数の多さ 空間の広さ 他クラスでの遊びの難しさ 生活と遊びの分離 保育室以外の遊びスペース 生活遊び双方を担う保育室 遊び継続の保障不可 ランチルーム 生活に合わせた環境の変化
職員連携	園の雰囲気 職員の意識 無駄遣いと認識 園の価値観 意見の受容 提案を傾聴する姿勢 担任間カンファレンス 担任各々の見通し 担任間連携の必要性 午睡がないこと 話し合いの停滞 職員の雰囲気の重要性 和やかで楽しい雰囲気 保育者の安心感 躊躇ない意見の受容 言葉での伝え方 共に思考 個別に思考

育者は「戸惑い」を感じていた。一方で、保育者は「子どもの様子基点」の環境構成の良さを実感していた。また、20年以上群では「子どもの様子」に合わせて環境の再構成を繰り返し、保育を進めていくクラス担任の姿を客観的に捉え「感心」していた。

困難感 保育者は「子どもの様子」から、「コーナー設置」や家具の製作の必要性を感じているが、クラスを運営していく中での「余裕の無さ」や環境構成の実践には「時間が必要」であることなどが、環境構成の実践を阻んでいた。また、多くの保育者から語られたのが「生活と遊びの分離」についてであった。保育室が「生活と遊び双方を担う場」であることから、1日の流れの中で、「生活に合わせた環境の変化」があり、「遊び継続の保障不可」であることに保育者は困難感を感じていた。

職員連携 保育者は、環境構成の実践のしやすさに「園の雰囲気」や「担任間連携」が関係していると語った。「和やかで楽しい雰囲気」や共に考え、「躊躇ない意見の受容」は、保育者の安心感につながり環境構成実践のしやすさにつながっていた。また、保育者は午睡の時間を利用して「担任間カンファレンス」を行っていた。午睡の無い幼児組は、「担任3人が落ち着いて話をする時間がほぼない」としながらも、クラス会議を夕方に行うなどの方法で連携の時間を確保していた。

考 察

以上の結果から、環境構成における保育者の意識と環境構成の「難しさ」について以下のことが考えられる。

1 環境構成における保育者の意識

①子ども主体を大切にするための環境構成

保育者は、子どもが自分で遊びを選べる環境や好きな遊びを存分に楽しめる環境を構成し、その中に教育的な意図を織り込んでいた。菊池ら(2012)は「子どもは主体的に活動に取り組むとき、その力を最大限に発揮でき、また、伸びる可能性も最も大きくなる」とし、その方法として、「子どもが自ら選び取っていく具体的な体験や遊びの中で教育的なねらいも実現されていくのではないだろうか」と述べている。X保育所の保育者は、子ども主体の行動や思考を大切にする方法として、子どもの様子の観察や、子どもの姿をもとに保育者間でのカンファレンスを重ねながら子どもの興味や思考を把握し環

境構成に取り入れようとしていた。さらに、遊び場が楽しいものであること、安心できる場であることも合わせて考慮して環境構成を実践しており、これらの環境構成は子どもを中心に据えた子ども主体を大切にするための保育環境と言えると考えられる。

②保育者の心のゆとりのための環境構成

保育環境は、子どもの生活が豊かなものとなるよう(保育所保育指針2018)に構成されるものである。しかし、保育者は環境構成を工夫することで、子どもへの指示が減少し、心に余裕が持て、穏やかな気持ちで保育に携わることができることを実感しており、保育者自身の心のゆとりも踏まえた環境を構成していくことも、環境構成のねらいの一つであると自覚していた。戸田(2018)は、「本気で遊ぶには、時間的にも空間的にも、子どもと相互性をもつ保育者の心にも余裕がなければならない」と述べており、環境構成を行うことで保育者の心のゆとりを生むことは、保育者が子どもを穏やかな気持ちで見守ったり、本気で一緒に遊ぶ時間をもつ余裕につながり、遊びの充実にもつながっていると考えられる。

③チームで実践する環境構成

X保育所の保育者が環境構成を実践できていないと感じているのは、担任間の連携が取れていない時であった。また、園の雰囲気やカンファレンスの時間の確保など、職員間の連携が円滑であることが、環境構成の実践のしやすさにつながっていると実感していた。門田(2019)は保育は保育者一人の経験や知識だけで展開されるものではなく、保育者が務める園、その園に勤務する他の保育者や園長が一体となって実践されるものであると述べている。環境構成の実践においても、園が一体となって進めていくべきであるし、保育者自身も環境構成は職員が連携しチームとしておこなっていくものと認識していると考えられる。

2 環境構成の「難しさ」の要因

保育者が感じる環境構成の「難しさ」の要因について、以下の3点が考えられる。

①時間や園の構造的な問題

環境構成は家具の移動や玩具の用意等、時間を必要とすることが多く、保育者は環境構成を行う時間の確保に「難しさ」を感じていた。また、1つの保育室内で、生活と遊び双方を担うことも「難しさ」の要因となっていた。長谷川ら(2019)は子どもの主体的な活動を大切に

た環境という視点から、保育の流れ、空間の使われ方と、そこでの子どもや保育者の動きについて検討し、昼食から午睡の行為の流れに沿って空間の使い方を考える必要性や具体的な方法を示している。X 保育所においても、保育者が子ども主体の生活の流れや遊びの保障を大切にしたいと考えているため、課題を認識しているが、保育室の不足や空間の狭さといった園の構造的な問題が課題の解決を阻み保育者が「難しさ」を感じる要因になっていると考えられる。

②年齢・発達に応じた特有の「難しさ」

乳児クラスでは、安全や安心に関連したカテゴリーが多く抽出されたのに対し、幼児クラスでは子どもの興味の把握や遊び込みといった、遊びに関わるカテゴリーが多く抽出された。また、発達相応の遊びを用意するため、育ちに適した玩具の作成を行う乳児クラスに対して、幼児クラスでは、遊び選択が可能なコーナーの数を用意しながらも、好きな遊びをいかに充実させていくかに主眼が置かれていた。戸田(2013)は遊びを通して育てる保育者の専門性について、低年齢と幼児期後期に分けて考察し、幼児期後期になると「育てたい目的」は「複雑」とし、子どもが「保育者の援助によってではなく、自分たち自身で判断して、よりよい方向を見出し、またそれを実現できたという自信や手ごたえになることが重要」としている。戸田(2013)の知見を踏まえると、幼児クラスにおいて、遊びに関するカテゴリーが多く抽出されたのは、単に乳児に比べて養護面の配慮事項が減少するという理由のみでなく、幼児クラスの環境構成においては、子ども一人一人の興味の把握と、それに対応した玩具の用意に留まらず、遊びのどこに、教育的意図を加えていくか、子ども同士の関わりの中での育ちと保育者の介入のバランスといった、そのやりようの幅広さに保育者があらゆる手段を想定し試行錯誤しながら進めているとも考えられ、環境構成には年齢や発達特性に応じた特有の「難しさ」があると考えられる。

③一人で進めることは難しい環境構成

グループインタビューの結果、保育者は環境構成の実践のしやすさに職員間の連携が関係していると感じていた。保育者が一人で課題を感じているだけでは、環境構成は始まらず、「難しさ」の要因の一つになっていると言える。大豆生田(2019)は、日常の振り返りと語り合う風土が、子どもの姿ベースの保育サイクルを生

み出していくとしており、職員連携が保育実践の充実につながることを示唆している。質の高い環境構成を実践していくにあたっては、職員連携の充実は不可欠であるが、環境構成の実践のしやすさについても同様のことが言えると考えられる。

まとめと今後の課題

本研究の目的は、保育者が環境構成をどのように意識しているのかを明らかにすることを通して、環境構成の「難しさ」の要因を探ることであった。

その結果、保育者は子ども一人一人を大切にしたい保育を実現してくための方法の一つとして環境構成を行っていること、片付けのしやすい環境等、保育者が穏やかな気持ちで保育に向かうことができるために環境構成を行っていることが明らかになった。一方で、環境構成には時間や園の構造上の問題の他、子どもの年齢や発達特性に応じた特有の「難しさ」があることが明らかになった。また、保育環境構成を実践していくにあたっては、円滑な職員間連携が必須であり、職員間連携が不足している場合は「難しさ」の要因にもなり得ることが明らかになった。保育室内の物の移動や空間構成の変更は、保育者間での課題の共有や同意が必須であり、単独で行うことはできない。また、環境構成が子どもに適するか否かは保育実践を進めてみないことには分からず、試行錯誤が必要な過程から、一人で実践していくことには「難しさ」がある。更に、環境構成を進めていくためには、作成のための時間の確保など、保育者間での役割分担も必要となり、環境構成実践を進めていく上で保育者間の連携・協働が非常に重要な要素になってくることが示唆された。

本研究は、X 保育所における保育者を対象にグループインタビューを実施し検討したものである。環境構成に対する取り組みや意識には園やクラス、担任保育者によって違いがあると考えられ、環境構成における意識やそこに潜む「難しさ」を一般化するには、より多くのデータを収集分析していく必要があると考え、今後の課題とする。

【引用参考文献】

秋田喜代美, 箕輪潤子, 高櫻綾子 (2007) 「保育の質研究の展望と課題」東京大学大学院教育学研究科紀要第47巻 289-305

- 安梅勅江 (2001) 「ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法 科学的根拠に基づく質的研究法の展開」医歯薬出版株式会社
- 安梅勅江 (2010) 「ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法Ⅲ / 論文作成編科学的根拠に基づく質的研究法の展開」医歯薬出版株式会社
- 長谷川恵美, 定行まり子 (2019) 「クラス人数規模と保育空間構成に関する研究 1歳児クラスの活動場面に着目して」日本建築学会計画系論文集第84巻第761号1549-1558
- Heckman, J.J (2006) Giving Kids a Fair Chance. MA: The MIT Press (ジェームズ・J・ヘックマン 古草秀子 (訳) (2015) 幼児教育の経済学 東洋経済新報社)
- 伊神大四郎, 井坪康, 釜江正巳, 小林栄子, 堀田和弘, 八並勝正 (1990) 「保育環境の実際」建帛社
- 漁田俊子, 山田悟史, 酒井範子, 宮地由紀子, 那須恵子, 漁田武雄, 久保田孝之, 日隈美代子 (2018) 「3歳未満児の発達と保育: 保育現場における現状と課題」環境と経営第24巻第2号27-36
- 門田理世 (2019) 「アクティベート保育学②保育者論」ミネルヴァ書房
- 鹿嶋桃子 (2022) 「「OECD 国際幼児教育・保育従事者調査2018年報告書」に関する研究ノート: 「構造の質」に着目して」帯広大谷短期大学地域連携推進センター紀要第9号23-35
- 菊池紫乃, 内田伸子 (2012) 「子ども中心の保育—子どもの主体性を大切にする援助—」教育総合研究: 江戸川大学教育課程センター紀要 (1) 8-15
- 古賀松香 (2011) 「1歳児保育の難しさとは何か」保育学研究第49号第3号8-19
- 厚生労働省 (2018) 「保育所保育指針解説」
- 西本雅人, 今井正次, 木下誠一 (2006) 「保育プログラムに伴うコーナー設定の一年間の変化 保育者による空間設定からみる保育室計画に関する研究」日本建築学会計画系論文集第601号47-55
- 大豆生田啓友 (2019) 「発達 No.158, Vol40」ミネルヴァ書房 52-57
- 齋藤多江子 (2012) 「1-2歳児の仲間と物とのかかわり—仲間と同じものに関心を持つ」行為に着目して」保育学研究50(2) 6-17
- 佐々木由美子, 大谷真理子 (2019) 「主体的な遊びを支える保育実践に関する一考察—実践を困難にしている要因—」未来の保育と教育. 東京未来大学保育教養センター紀要第6号 47-56
- 汐見稔幸 (2018) 「日本の保育・幼児教育はどこへ向かうのか」発達 154, 2-8
- 高山静子 (2014) 「環境構成の理論と実践—保育の専門性に基づいて—」郁洋舎
- 戸田正美 (2013) 「発達 No.134, Vol.34」ミネルヴァ書房22-27
- 戸田雅美 (2018) 「発達 No.154, Vol.39」ミネルヴァ書房37
- 上田敏丈 (2013) 「保育環境の中に見る保育者の専門性」発達 vol.34 28-33